

発行：株式会社リンク・インタラック
 担当：事業統括部 商品開発ユニット
 住所：東京都中央区銀座四丁目12番15号
 TEL：03-6853-8265 FAX：03-6859-9070 E-mail：marketing@interac.co.jp



リンク・インタラックがALTの活用効果を全国調査 ALTの密度（配置割合）や授業参加頻度で、 英語への学習意欲や技能に差

ALT1人当たりの子どもの数が少ないと、英語の学習意欲が高まる——。今年6、7月にリンク・インタラックが行った調査で、ALTと学習意欲等の関連性が明らかになりました。ALTの配置に関する効果測定が全国的にこれほど大規模に行われたのは初めてで、調査・分析に協力いただいた敬愛大学英語教育開発センター長・国際学部の向後秀明教授は「外国語学習において、対象となる言語のネイティブスピーカーがいたほうが良いという印象論が裏付けられた」とコメントしています。調査結果の概要と、リンク・インタラックのALT配置に関する見解をお伝えします。

全国2万8,000人の小中学生にアンケート

本調査は、ALTの活用効果等を検証し、今後、各自治体の英語教育施策に活用していただくため、リンク・インタラックが2021年6、7月にかけて実施したものです。

小学6年生と中学3年生の「英語に対する意識」、ならびに中学3年生の英語の「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」を調査しました。これは、小・中学校の新しい学習指導要領の「外国語」において求められる資質・能力に沿ったものです。

本調査の対象は、弊社のALTを配置している小・中学校に通う児童・生徒で、小学6年、中学3年の合計約2万8,000人。小・中学生の英語に対する意識を「アンケート調査」によって、中学生の英語力（「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」）を「英語テスト」によって調査しました。《表1》

アンケート調査は、英語や英語学習に対する意識等に関する

《図1》アンケートの質問内容と、英語テストの問題構成

アンケート質問内容

小学校6年(10問)	
Q1	英語の勉強は楽しい。
Q2	これからも英語を学び続けたい。
Q3	外国の人たちや外国のことについてもっと知りたい。
Q4	自分の考えや気持ちを英語で伝えてみたい。
Q5	外国の人たちと英語で話してみたい。
Q6	外国の人たちと英語でメールや手紙のやり取りをしてみたい。
Q7	外国の人と友だちになりたい。
Q8	外国のテレビ番組や映画を英語のままで見たい。
Q9	英語で書かれたインターネットのサイトや記事、ブログを読んでみたい。
Q10	将来、英語を使って仕事をしたり、外国の人たちと一緒に仕事をしたい。

中学校3年(13問)	
Q1	英語の勉強は楽しい。
Q2	これからも英語を学び続けたい。
Q3	外国の人たちや外国のことについてもっと知りたい。
Q4	自分の考えや気持ちを英語で伝えてみたい。
Q5	外国の人に英語で質問されたら、英語で答えてみたい。
Q6	外国の人たちと英語で話してみたい。
Q7	外国の人たちと英語でメールや手紙のやり取りをしてみたい。
Q8	外国の友だちを作りたい。
Q9	外国のテレビ番組や映画を英語のままで見たい。
Q10	英語で書かれたインターネットのサイトや記事、ブログを読んでみたい。
Q11	将来、英語を使うような生活をしたり仕事をしたりしたい。
Q12	学んだ英語を活かして、将来の生活や仕事の役に立てたい。
Q13	外国の人と一緒に仕事したい。

英語テスト 問題構成

大問	小問	形式	レベル	出題内容
1	(1)-(9)	空所補充	4級	短文又は会話文中の空所に適切な語(句)を補う。語彙4問、熟語3問、文法2問。
2	(10)-(14)	空所補充	4級	会話文中の空所に適切な文又は文の一部を補う問題5問。
3	(15)-(17)	内容一致選択	4級	長文の内容に関する質問に答える問題3問。
4	(18)-(20)	内容一致選択	3級	長文の内容に関する質問に答える問題3問。

る質問が小学校は10問、中学校は13問で、「とてもそう思う」「どちらかと言えばそう思う」「どちらかと言えばそう思わない」「ほとんどそう思わない」の4択方式としました。また、中学校で行った英語テストは、実用英語技能検定(英検)4級レベルを中心とした20問(うち3問は3級レベル)で、記述式のない4択方式とし、いずれも学校の授業や教育活動の負担にならないよう考慮しました。《図1》

《表1》調査対象

	小学校6年	中学校3年
I アンケート調査 英語に対する意識	学校数： 334校 回答者数：16,236名	学校数： 139校 回答者数：11,902名
II 英語テスト 「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」		校数： 87校 回答者数： 6,228名

※中学校の「英語テスト」は、「アンケート調査」を実施した学校の一部で実施。

ALTの密度や授業参加頻度による違いが明らかに

調査前に立てた仮説は、①「ALT1人当たりの児童生徒数」がより少ない(=ALTの配置割合が高い)ほうが、児童生徒の英語(学習)への意識や英語力に対するプラス効果は大きい。②「ALTの授業参加頻度」(=ALTの週当たりの授業参加回数)が高いほうが、児童生徒の英語(学習)への意識や英語力に対するプラス効果は大きい、の2つです。今回の調査を通して、これらの仮説がいずれも一定程度正しいことが導き出されました。以下に、アンケート調査の主な結果をまとめます。

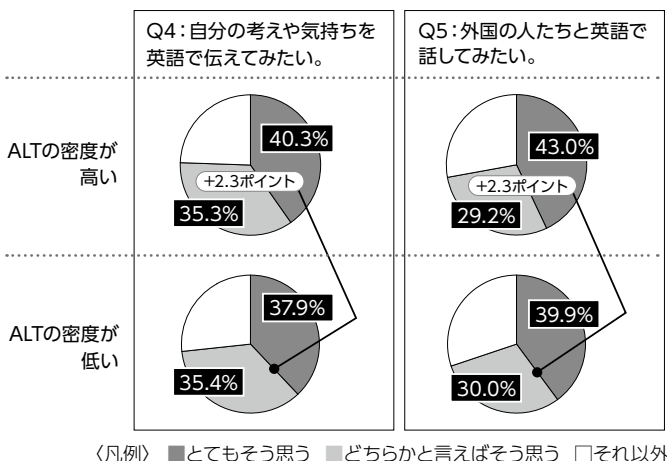
結果1 ALTの密度が高いほうが、英語への意識は高い

調査対象校をALTの「密度が高い」(ALT1人当たりの児童生徒数が少ない)自治体のグループと、「密度が低い」(ALT1人当たりの児童生徒数が多い)自治体のグループとに分けて調べたところ、アンケート調査において、小学校の質問10問中9問で、中学校の質問13問中12問で、「とてもそう思う」又は「どちらかと言えばそう思う」と肯定的な回答をした児童生徒の割合は、ALTの「密度が高い」自治体のグループのほうが高くなっていました。

例えば、小学校では、「Q4 自分の考えや気持ちを英語で伝えてみたい」に肯定的な回答(「とてもそう思う」「どちらかと言えばそう思う」)をした児童の割合は、密度の高い自治体では75.6%なのに対し、密度の低い自治体では73.3%でした。また、「Q5 外国の人たちと英語で話してみたい」に肯定的な回答をした児童の割合は、密度の高い自治体では72.2%、密度の低い自治体では69.9%となりました。《図2》

中学校では、「Q1 英語の勉強は楽しい」に肯定的な回答をした生徒の割合は、密度が高い自治体で68.1%、低い自治体で62.9%と、5.2ポイントの開きが見られました。また、「Q3 外国の人たちや外国のことについてもっと知りたい」に肯定的な回答をした生徒の割合は、密度が高い自治体で70.9%、低い自治体で66.6%と、4.3ポイントの開きがありました。《図3》

《図2》 ALTの密度によって回答に開きが見られた質問項目(小学校)



これらの結果から、自治体ごとに、より多くのALTを配置し、ALT1人当たりが受け持つ児童生徒数をより少なくすることが、子どもたちの英語学習や実際の場面での英語使用に対する肯定感を高められる可能性があることがわかります。

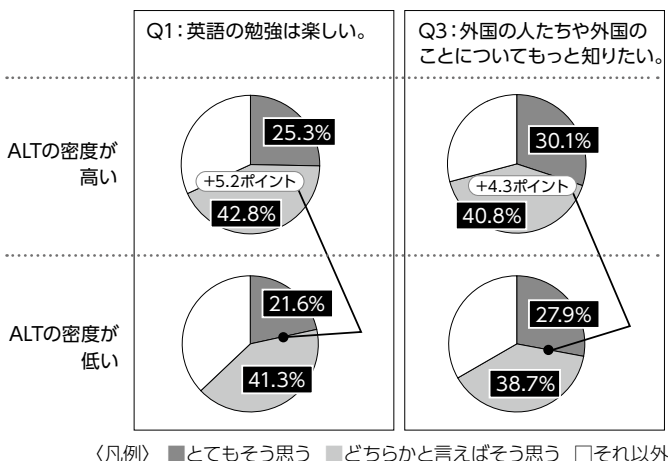
結果2 ALTの授業参加頻度が高いほうが、英語への意識は高い

ALTの密度が高い自治体について、ALTの授業参加頻度を小学校では「週に2回程度」、「週に1回程度」、「隔週に1回程度」の3グループ、中学校では「週に3回程度」、「週に2回程度」、「週に1回程度」の3グループに分けて、アンケート調査とのクロス集計を行いました。その結果、ALTの授業参加頻度が小学校では「週2回程度」、中学校では「週に3回程度」のグループで、英語や英語学習に対して「とてもそう思う」と肯定的な評価をする児童生徒の割合が最も高くなりました。つまり、小学校、中学校のいずれにおいても、ALTの授業参加頻度が高いほうが児童生徒は英語(学習)に対して肯定的に捉えているということです。

また、小学校では、ALTの授業参加頻度が「週に2回程度」のグループで、アンケート調査の「外国の人たちと英語でメールや手紙のやり取りをしてみたい」「外国のテレビ番組や映画を英語のままで見たい」「英語で書かれたインターネットのサイトや記事、ブログを読みたい」などの項目で、「とてもそう思う」と回答した児童の割合が高いこともわかりました。中学校では、アンケート13項目のうち12項目において、ALTの授業参加頻度が「週に3回程度」のグループで、「とてもそう思う」と回答した生徒の割合が最も高くなっています。

これらのことから、ALTの授業への参加頻度を上げる(週当たりの授業参加回数を増やす)ことによって、小学校では、英語の読み書きや、現在及び将来の英語使用に対して強い意欲を持つ児童が増える可能性、中学校では、英語学習、外国の人々や異文化、現在及び将来の英語使用に対して強い意欲や興味関心を持つ生徒が増える可能性があると考えられます。

《図3》 ALTの密度によって回答に開きが見られた質問項目(中学校)



結果3 ALTの授業参加頻度が高いほうが、英語力に与える影響が大きい

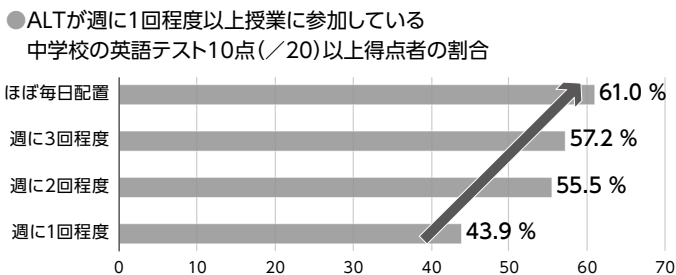
英語テストを実施した中学校では、ALTの授業参加頻度が高いほど、テストの平均点、正答率50%以上の得点者の割合、長文内容一致問題の正答率のいずれもが高いことがわかりました。

ALTが週に1回程度以上授業に参加している学校の結果を比較すると、ALTが「ほぼ毎日配置」されている学校の平均点は11.0点(20点満点)だったのに対し、「週に1回程度」の学校では9.1点と開きが見られました。さらに、正答率50%以上(20点満点中10点以上)の生徒の割合を見ると、ALTの授業参加回数が多いほど、その割合は高くなっています。《図4》

また、設問ごとに見ていくと、ALTが「ほぼ毎日配置」されている学校では、他の配置頻度の学校より正答率が高くなっています。特に、「長文内容一致問題」では、6問中(英検4級レベル3問、同3級レベル3問)5問において、ALTが「ほぼ毎日配置」されている学校の正答率が最も高くなりました。

これらの結果から、ALTの授業への参加頻度を高くすることによって、筆記テストで測られる英語力を向上させることができる可能性が高いこと、また、ALTがほぼ毎日配置されて授業に参加している環境下であれば、中学校卒業程度とされる英検3級レベルの問題にも対応できる英語力を身に付ける中学生がより多くなる可能性があると考えられます。

《図4》 ALTが週に1回程度以上授業に参加している中学校で正答率50%以上の得点者の割合



まとめ 敬愛大学英語教育開発センター長・国際学部 向後秀明教授のコメント

今回の調査で結果分析に協力した向後秀明教授は、「これらの結果はあくまで1つの調査に基づいた考察であり、絶対的な結果を示すものではない」と前置きしたうえで、「日本の学校にALTが配置されることの効果測定は、その難しさもあってこれまでほとんど行われてこなかった。全国の小学生16,000名以上、中学生11,000名以上が参加した今回の大規模調査によって、一定程度の傾向は把握できる。ALTを配置することの必要性や効果を、教師の経験や勘、或いは印象論で語るのとは適切ではない。今回の調査が、エビデンスに基づいた施策立案の資料になるとともに、児童生徒のためにより有効な英語教育が展開されるための一助となることを期待している」と話します。

調査の企画・実施にあたった弊社事業統括部の游草倫は、「テストの結果がよいことに越したことはないですが、より重要なのは、英語学習や英語使用に対する児童・生徒の肯定感。小・中学校を通じて英語を教え込むといった姿勢ではなく、英語を用いる必然性の機会を作り、ALTを通じて、コミュニケーションを図ることの意義や楽しさを十分に経験させることが、資質・能力の向上につながると考えています」とコメントしています。

今回の調査では、ALTと関わる密度や頻度が高いほど、英語に向き合う児童生徒の意欲が高い、という結果が明らかになりました。弊社は、子どもたちがALTと同じ空間を共有することが何より大切だと考えています。「全人格的教育を通じて意味のあふれる社会を実現する」という企業理念を実現すべく、地域に住むALTは、子どもたち一人ひとりを「かけがえない存在」と考え、個性や違いを大切にしながら接しています。これは決してバーチャルな世界に置き換えることはできない価値であり、文化や個性が異なるALTが子どもたちと英語を使ってコミュニケーションを図ることで実現します。

こうした関係性の経験こそ、子どもたちの資質・能力の向上につながると考え、これからもALTの配置事業を通して、社会に貢献してまいります。